2019 年 1 月 24 日

2018 年度 学生の自主学修時間の実態分析：授業評価アンケートデータより

FD 委員会

要約

2016 年度から 2018 年度における授業評価アンケート調査結果を用い，本学における授業以外の学修時間（自主学修時間）の推移を分析した．全科目，選択科目，必修科目ごとに自主学修時間の推移を推計した結果，いずれの区分においても自主学修時間は 3 年間において大きく変化していないという結果となった．

これらの結果は他の調査結果と同様のものである．学生の自主学修時間を増加させるためには，予習・復習などの具体的指示の確立，履修上限の制限（キャップ制）による時間確保などの制度的検討が必要であろう．

１． 授業評価アンケートにおける自主学習時間について

分析に用いたのは 2016 年度，2017 年度，2018 年度における授業評価アンケートデータである[1]．アンケート項目の設問 10a において当該授業科目 1 回あたりの自主学習時間を回答させている．具体的な設問内容は以下の通りである．

設問 10a： 「あなたは，この授業科目に関して，授業時間以外に 1 回あたりどのくらい自主学習を行いましたか」

回答形式： ⑤3 時間以上 ④2 時間～3 時間 ③1 時間～2 時間 ②1 時間未満 ①0 分

ただし，他の調査結果と比較しやすくするために，本稿においては回答項目を分単位に変換したものを分析に用いる[2]； 変換後： ⑤180 分 ④150 分 ③90 分 ②30 分 ①0 分.

２． 他の調査による大学生の自主学修時間

大学生の自主学修時間に関する問題意識は以前から広く認識されてきた. 国立教育政策研究所（2016）によれば 2007 年時点において大学生の授業時間に対する自主学修時間（予習・復習）比率は約 25%であり，2014 年時点でもほとんど変化していない（表 1）．またベネッセ（2018）においても同様の調査を 2012 年と 2016 年で行っており，自主学修時間比率はそれぞれ 21%，23%となっている[3].

---

[1] 2015 年度以前においては，授業評価アンケート項目において学修時間に関する設問は設定されていない.

[2] 回答項目⑤と①を除いてそれぞれの中間値を代表値として変換しただけであり，あくまでも簡易的なものである.

[3] Arum et al. (2011) によれば，アメリカの大学生は週当たり全時間の 9%を授業に，7%を自主学修に費やしている．これは 90 分授業に換算した場合，70 分を自主学修時間に費やしていることになる．日

これらの比率をもとに授業時間を 90 分と仮定した場合，大学生の予習・復習を中心とする自主学修時間はここ 10 年の間において平均 30 分弱の水準を推移していると考えられる．

表 1　大学生の自主学修時間比率：2014 年

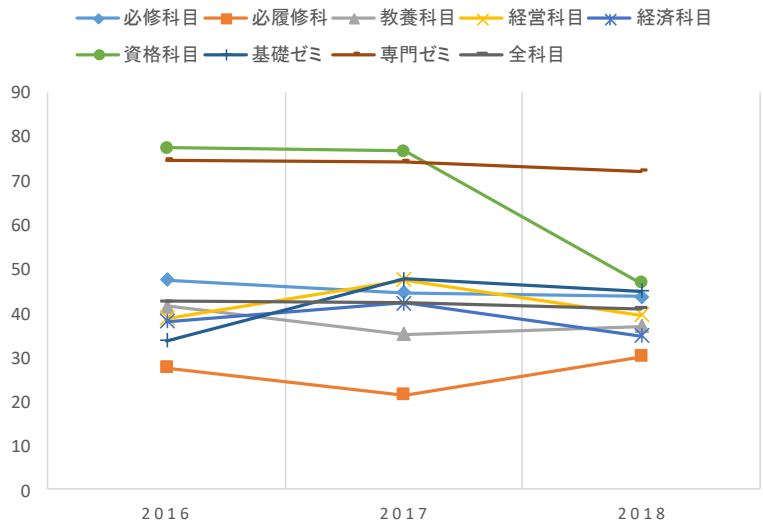
	授業内学習時間	授業外学習時間	合計	自主学修比率
1年生	20.0	4.9	24.9	0.25
2年生	19.7	5.2	24.9	0.26
3年生	15.9	5.0	20.9	0.31
4年生	5.8	2.9	8.7	0.50
（出所）　国立教育政策研究所（2016）より作成．				

３．　本学における自主学修時間

３．１　自主学修時間の推移（全体）

図 1 は 2016 年，2017 年，2018 年における 1 科目あたりの自主学修時間の推移を全科目と科目区分ごとに表したものである[4]．

図 1　平均自主学修時間の推移



✓　全科目平均では自主学修時間は 40 分でほぼ一定．

✓　専門ゼミと資格科目の自主学修時間が多い．

　　→　2018 年度の資格科目の自主学修時間については不明．

✓　必履修科目の自主学修時間がもっとも短い．

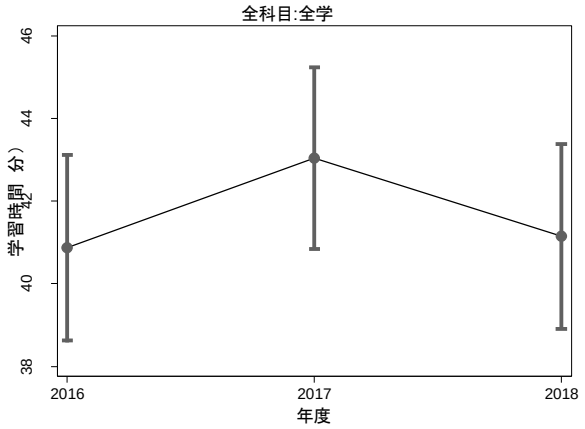
本の学生よりかなり多くの時間を自主学修に費やしているが，この数値自体が年々低下傾向にあると指摘されている．

[4] 本学のアンケート調査は学期末に実施しており，その時点まで受講を継続させた学生のみが回答している．よってその自主学修時間の水準については数値が過大になっている可能性が高い．

３．２　調整済み自主学修時間とその推移

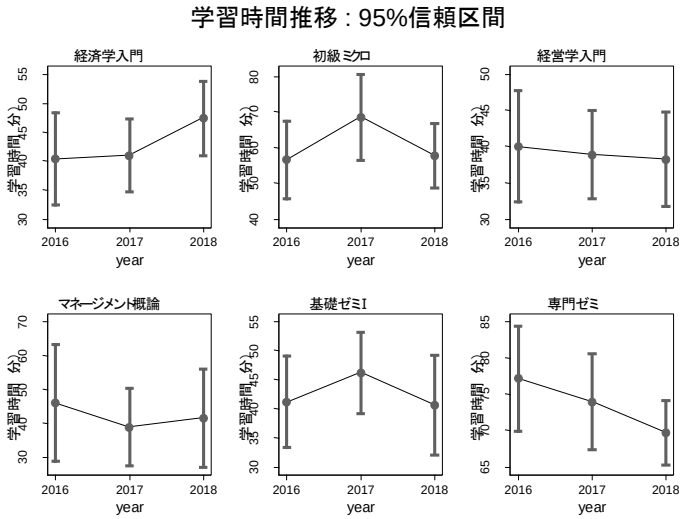
自主学修時間は科目区分や担当者，受講者本人の学年など様々な影響を受けていると考えられる．よってそれらの要因をコントロールした上で，年度または学年ごとの調整済み平均値（95%信頼区間）をプロットしたものが以下の図である[5].

図２　調整済み自主学修時間（95%信頼区間）: 全科目



✓　科目特性，担当者，学年をコントロールした上でも，3 年間で自主学修時間は変化していない.

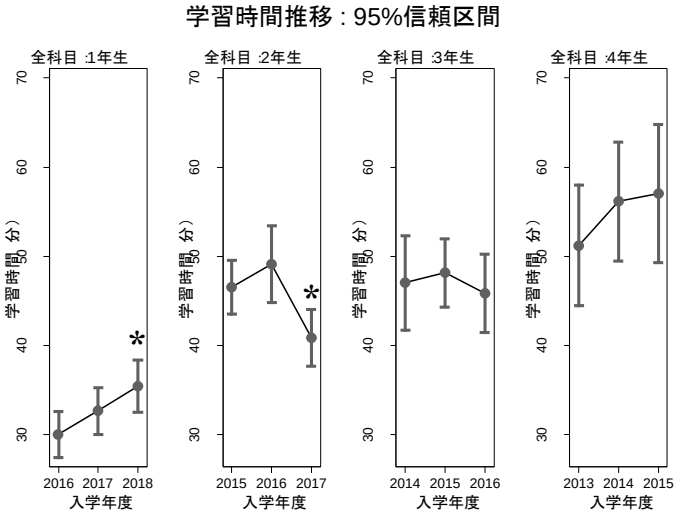
図３　調整済み自主学修時間（95%信頼区間）: 必修科目



✓　必修科目においてもここ 3 年間で自主学修時間は変化していない.

図４　調整済み自主学修時間（95%信頼区間）: 学年別

[5] コントロール変数として年ダミー，学年ダミー，科目区分ダミー，担当者ダミーを基本とした OLS 推計を行って予測値を計算している.



- ✓ 1年生は2016年度入学者よりも2018年度入学者の自主学修時間が5%水準で有意に増加している．
  → 理由？
- ✓ 2年生は2015年度入学者よりも2017年度入学者の方が1%水準で有意に減少している．
  → 理由？
- ✓ 3年生と4年生では入学年度に関係なく一定．

4． まとめ

本学の学生における自主学修時間は他の調査と比較してとくに少ないというわけではない．また3年間での推移はほぼ変化なく安定している．ただし，現在の単位制度が前提とする自主学修時間の基準を満たす水準にはもちろん達していない．

（もし自主学修時間の向上を目指すなら）

これまでの先行調査においては自主学修時間が不十分であることの原因として，「アルバイトの負担」「1年生・2年生時点での過大な履修登録」などが指摘されている．またいうまでもなく，シラバスにおける指示や成績評価方法における学習活動を促進させるための制度・工夫等が自主学修時間の改善のためには不可欠であろう．

以上

参考文献

国立教育政策研究所（2016）「大学生の学修実態に関する調査研究について」文部科学省．

ベネッセ教育総合研究所（2018）「大学生の学修・生活実態調査報告書」ベネッセ．

Arum, A., J. Roksa and E. Cho (2011) “Improving Undergraduate Learning: Findings and Policy Recommendations from the SSRC-CLA Longitudinal Project,” Social Science Research Council.